

# 令和6年度入学者選抜試験

## 学校推薦型選抜問題

### 小論文 (120分)

(建築学科)

#### 注 意

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、8ページあります。
- 3 解答用紙は2枚、下書き用紙は2枚あります。解答用紙には解答欄以外に受験番号欄と氏名欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入しなさい。  
ただし、得点欄と整理番号欄は記入してはいけません。  
なお、解答は最初のひとマスを開けず、改行せずに続けて記入しなさい。  
また、行末以外は句読点も1文字分として当てなさい。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 6 下書き用紙は、下書き等に利用してもよろしい。
- 7 試験終了後、下書き用紙及び問題冊子は持ち帰りなさい。

問題 1 文章 1、文章 2 を読んで、設問に答えなさい。

## 文章 1

原っぱとは、つまり空き地である。宅地が造成され区画される。これは人工的な営みである。塀が築かれ、土地の形がきちんと確定される。一度は土地が均<sup>なら</sup>され、雑草が刈り取られる。そこまで行って、なにかの理由で、放置される。時間が経過して、セイタカアワダチソウなどの雑草が、背丈ほど伸びてくる。そして、原っぱができ上がる。更<sup>さら</sup>地というだけでは、原っぱではない。放置後の、適切な度合いの自然の遂行を必要とする。

「おそ松くん」でも「ドラえもん」でもいいけれど、漫画を見れば、原っぱにはいつも土管が転がっている。実際に、原っぱには土管があった。あと砂利とか。原っぱとは、宅地として完成する一歩手前で、その意図が見えなくなってしまった空間である。土管は必要があって運び込まれたはずだけれど、子供の誰もがなぜ土管がそこにあるのか知らなかったし、不思議にも思わなかった。土管は、子供たちにとって、ただそこにある、というあり方をした物だったのである。土管ひとつ描けば、それが原っぱを意味するという漫画の発見は、すごいな、と思う。土管ほど、原っぱという、確かにつくられた空間がそのつくられた意図を失っている環境を体現している物はなかったからである。

こういう原っぱが、子供たちにとって、日常的な絶好の遊び場だったことは、とても意義深いことだ。子供たちは、本能的に、原っぱを好んだ。それは、野球をしに行く場所ではなかった。ドッジボールをしに行く場所でもなかった。なにかの目的をもって行く場所ではなく、ともかくそこへ行って、それからなにをして遊ぶかを決められる特別な場所だった。原っぱそのまま楽しいのではない。そこでは、毎日のように新しい遊び方が開発されていた。風邪をひいて、二、三日行けなかつたりすると、もうみんなが遊んでいるルールがわからなくなってしまった。

子供たちは、いくらでも、原っぱを使った新しい遊びをそこから引き出すことができた。原っぱの楽しみは、その場所での遊び方を発明する楽しみであり、そこで今日何が起きることになるのかが、あらかじめわからないことの楽しみだった。

それが、人間の空間に対するかかわり方の自由ということの意味だ。この自由は、別の意味で同じくらい楽しかった遊園地と対極にある。遊園地は演出されている。どういう楽しさを子供が得られるか、それが最初に決められ、そこから逆算してつくられている。それもまたとても楽しいことに違いないけれど、そこにはかかわり方の自由がきわめて少ない。ジェットコースターには、ジェットコースターとしての遊び方以外が許されていない。

(青木淳『原っぱと遊園地』2004年、より)

## 文章 2

### 多様な遊び場

子どもの想像力と冒険心を刺激し、多様な遊びが展開できるように、敷地の自然な形状や樹木を有効に活用して、遊具や遊び場を適切に配置する。

●**砂場**——小さな子から年長児まで主体的に夢中になって遊べる、最も手軽で自由な想像の世界が広がる遊び場。創造性・自主性の向上、集団で遊ぶ中から協調性や社会性を育む。砂場はなるべく広く造りたい。(中略)衛生管理には気をつける。ペットの侵入防止対策をし、定期的に砂の洗浄・殺虫殺菌を行なう。処理方法は熱湯・炎熱処理などが安心、薬剤を使う場合は幼児に対する影響に注意する。

●**泥山**——スペースがあればぜひ設置したい。石や危険物の混入していない、汚染されていない土を高さ2mくらいは盛りたい。駆け上がり、転げ下り、水をまいて泥すべりと、実にダイナミックに夢中で遊ぶ。山の上の征服感は何ともいえない。

●**固定遊具**——場所を取るブランコやジャングルジムは近くの児童公園へ散歩に行つて遊ぶことにして、固定遊具は鉄棒・木のやぐらの檣に滑り台などとする。立ち木を利用し、身近な素材を組み合わせて、ごくシンプルな遊びの仕掛けをつくる。地面に立てた竹竿の上部を太い枝に固定して登り棒に、丸太を木の股に斜めに固定する、ロープやタイヤを吊り下げる。地面に丸太を寝かしたり、タイヤを半分埋めるなど多様に遊べる仕掛けを

設置する。

●プール——夏のプールは本当に楽しい。夏しか使わないので、FRPの既製品を組み立てるのが一般的。設置場所と給排水の方法、パーツをしまう場所を決めておく。0・1歳児用にはビニールプールでもよいが、芝生庭の平らな所に角材で囲い養生シートを広げて、2 cmくらいの深さに水を張れば、ハイハイ用の広くて立ち上がりのないプールが出来上がる。

(建築思潮研究所編『[建築設計資料] 91 保育園・幼稚園 3』2003年、より)

設問 1 文章 1 の要点を 100 字以内でまとめなさい。(15 点)

設問 2 文章 1 の「原っぱ」の遊び場と、文章 2 を参考にして作られた遊び場との違いについて、200 字以内で説明しなさい。(25 点)

設問 3 文章 1 と文章 2 の内容をふまえて、あなたが子供の頃に経験した「遊び場」と「遊び」について 300 字以内で説明しなさい。(35 点)



問題 2 文章 1、文章 2 を読んで、設問に答えなさい。

### 文章 1

先年、斑鳩いかるがの古塔再建のことに少しかかわっていたので、その塔工事の棟梁とうりょうをつとめる西岡さんと、お近付きになることができた。

西岡さんは父ならみつ檀光、長男つねかず常一、次男ならじろう檀二郎と一家三人そろって、ともに堂塔古建築で知られる棟梁たちである。

(中略)

三人が一番先に私に教えてくれたことは、“木は生きている”ということだった。むろん三人どうぎ同坐で教えてくれたのではない。時も所も別々なのだが、三人とも私に最初にきかせてくれたのが“木は生きている”ということである。大工さんのいう“木”は立木ではない。立木としての生命を終わったあとの“材”をさす。私は緑の葉をもつ立木を、生きている木だと思い、材になった木が生きているとは思わなかった。しかし西岡さんたちは、木は立木のうちの命と、材になってからの命と、二度の命をもつものだ、という。棟梁たちは法隆寺の大修覆を手がけており、千二百年も前の古材を手にもふれ、腕にかかえ、皮膚で、肌で知っている人である。そういう貴重な経験かんげんの上で信念をもって“木は生きている”という。法隆寺千二百年の昔の材に、ひと鉋かんなあてれば、いきいきとしたきめと光沢のある肌を現し、芳香をたてる。湿気を吸えばふくよかに、乾燥すればしかむ。これは生きている証あかしではないか。強風には撓たわみ、地震にも歪ゆがむが、よく耐えてまた元に戻る。これも生きている証あか拠しよせんじゃないか、という。なるほどと思い、わかったような気もしたし、また、所詮は実地に納得するよりほか、すっきりとわかりつくすことはできまいとも思った。

(中略)

そんなある日、弟棟梁の檀二郎さんが立ち寄ってくれた。私のいるところは、ちょうど檀二郎さんの出勤路の途中にあるので、時折たずねてくれる。もの静かな人で、話も静かだが気さくに、これまでこなしてきた仕事のことなどきかせてくれた。その日は来たときから少し調子が重かったが、やがて洩りながら、今日の話は、どうも縁起のいい話じゃないと思うので、しようか、しまいかと考えあぐねているのだが、という。なんの話かときいたところ“木の死んだのことで。”

どんな良材、強材であろうと木には木の寿命があり、寿命がつかれば死ぬ。寿命を使

いつくして死んだ木の姿は、生きている木にはない、また別の貴さ、安らかさがある、  
檜二郎さんはたまらなく心惹かれるという。もし縁起をかまわないのなら、木の死んだ  
のも見ておいてもらいたい。生きている木ばかり見せておいたのでは、片手落ちなわけ  
で、生きても死んでも、木というものは立派だ、と知っておいてもらいたいし、一度そ  
れを見ておけば、きっとあなたの何かの役にたつと思う、という。なんという心の深さ  
だろうと、打たれてしまって、ただ有難うというばかりしかできなかった。

翌日、早速見せてもらった。檜<sup>ひのき</sup>と杉と松だった。ひと目みて、これは全く寿命の限り  
を生きつくして、然し、はっきり檜は檜、杉は杉の面影を残して終わっている、と肯<sup>うなず</sup>  
けた。生きて役立っていた時の張りや力をすっかり消して、その代りに気易<sup>きやす</sup>げに、なんの  
こだわりもなく鎮<sup>しず</sup>まっているので、自然の寿命が尽きるというのは、こういう安息の雰  
囲気をかもすものなのだろうかと思った。なにかは知らず、安堵感のようなものもあり、  
名残惜しさのようなものもあり、けれども、ちっともベトつかない、質のいい感動があ  
った。しかも、なんとなくわかった気のすることがあった。それはかつて西岡三棟梁が、  
それぞれ一番はじめに私に教えてくれた “木は生きている” ということの滞りが解け  
たのである。

(幸田文『木』1995年、より)

## 文章 2

# 著作権の観点から、公表していません

《参考》

(著) ジョージ・ナカシマ

(訳) 神代雄一郎・佐藤由巳子

木のころー木匠回想記

株式会社 鹿島出版会、1983年

187頁～190頁を引用

著作権の観点から、公表していません

(ジョージ・ナカシマ『木のこころ－木匠回想記』神代雄一郎、佐藤由巳子訳、1983年、より)

※文章 1 と 2 の本文は原文のままである。ただし、一部に読み仮名を付し、送り仮名を改めた。また、文章 2 の原文にあった英語のルビは省略した。

設問 1 文章 1 の要点を 150 字以内でまとめなさい。(20 点)

設問 2 文章 2 の要点を 150 字以内でまとめなさい。(20 点)

設問 3 文章 1 と文章 2 の内容をふまえて、建築や家具などにおける、木の活かし方とその意義について自分の考えを 300 字以内で論じなさい。(35 点)